

平成30年度 第64回指導者会議 報告書（要約）

個人選手権大会のあり方を考える－検証と課題－

公益社団法人 日本学生陸上競技連合

本稿は標記報告書（第1部と第2部）の要約です。詳細の内容は別紙報告書をご参照ください。

<開会挨拶> (以下：敬称略)

松本会長 長年企業の経営等の仕事をしてきて、こういう会議や研修会について思うことがある。3つのキーワード（組織の力、人の成長、変化）を示して説明した。ぜひこの指導者会議が意義あるもので次への発展に結びつくように、そして今日学生や全国から来ているいろいろな人の成長に結び強くように願っています。

<提案趣旨>

阿保 会議の目的、方法などについて述べた。そして各種資料（全体で23頁）の説明を行った。

第1部 検証と課題

個人選手権のコンセプトや特色、記録上の成果を確認し、強化委員や選手のアンケート結果を紹介。地区学連幹事の声を拾い、平塚開催の検証なども行った。また会場との質疑応答もあった。その模様の一部を要約して報告する。

1. 演者らの紹介、会議のねらいと進め方

障子 1) 演者らの紹介：別紙報告書参照
船原 2) 会議のねらい：第1部は個人選手権の検証をすること。第2部はアジアパーミット大会開催の可能性を探ること。3) 進め方：個人選手権の特徴を説明し、変化させる可能性の高い大会であると述べた。アイデアと工夫によって、より意義のある大会になっていくので、活発な意見をお願いしたい。

2. 個人選手権のコンセプトや特色など

二見 ①個人選手権の歩み、②コンセプト、③大会の特色について述べた。

船原 他と違っている大会運営はありますか。

二見 平塚競技場の方のおかげで運営がスムーズに進んでいる。

船原 ①個人選手権は開催地が固定し、②平塚市の支援があり、③アンケート回答で会場の固定はいいが、サブトラックの問題あり。

3. 記録上の成果

栗山 記録の成果について発言した。**プラス面**：①追い風で試合ができる（短距離、跳躍）。②参加標準記録がインカレBよりやや低めの設定。③ユニバ大会の最終選考会として4回あった。**マイナス面**：①地区インカレから1～2週間で開催されることから選手のモチベーションが長く続かないのでは。6月の開催時期は良いのかどうか。②教育系大学では5月下旬から教育実習がある。4年生は非常にしんどい時期。③時期的に高温多湿である。特に長距離種目では厳しい時期。学生記録などが4種目誕生した。

4. 強化委員や選手のアンケート結果

船原 強化委員の声として **利点**：①地区インカレ後の大会が少ない時期に他地区と戦える。②標準記録を突破すれば何人でも出られる。一方、**懸念**：①開催時期が6月でいいのか。②海外選手が招待されることによって日本選手の順位が下がる。大学によっては優勝の評価を重んじることもある。**選手の声**：①大会は良い記録が出て、いい雰囲気やれるのだが。②大会の知名度が低い。③もっとアピールしてほしい。④地方選手にとっては全国の選手と競える機会。⑤日本選手権が近いので予行演習になる。⑥プレッシャーが少ないので思い切って記録を狙える。⑦長距離は、タイムに応じた数組でレースが行われるので、実力に応じて記録を狙いやすい。⑧海外選手については実際に競った9人の選手のうち5人が今後も海外選手と競いたい。⑨今回海外選手と競えなかった18名の中に今後競いたい人は12人いた。⑩ポイントランキングについても今後そういう大会ができれば、という声が指導者、選手とも多かった。

5. 地区学連幹事の声

坂入（東海学連） ①個人選手権に照準を合わせている選手はあまりいないのではないかと。②全国の高いレベルの選手と競える大会としては価値がある。

三田村（関西学連） 関西は毎週のように大会がある。選手によって合わせる大会が違う。

三田村（関西学連） 地区大会は、この時期は少ない。天候を考えても6月の時期はいいのかな。

伊藤（北信越学連） 目玉となる選手がいないと大会自体の盛り上がりには欠ける。

山田（関東学連） 海外選手と競うことのできる個人選手権は特色の1つか。

船原 今年も海外選手を招待することが理事会でも決定。まさに特色になる。

6. 平塚開催の検証

関根 競技委員会は多面的視点から競技会を見直している。①競技場の場所。②ウォーミングアップ施設。③平塚市の魅力：大型映像など。④競技会のコンセプト：個人の記録への挑戦（IAAFポイントランキング制度）。⑤ハンマー投の会場。

船原 ランキング制度などを考えた時、この大会がより意義のある大会に変えていける。

三条 第1部のテーマに関連して（意見）。①個人選手権の活性化と名称の変更。②日本インカレと個人選手権に対する参加状況の違い。③個人選手権を出場したい大会にする工夫を。

船原 IAAFランキング制度や海外交流等で別の価値も誕生。将来魅力的な大会に変えていく努力を。

7. 質問や意見

質問1（長谷川・東北学連） 新国立競技場ができたなら場所を変える可能性はあるか。

大西 平塚市とは特別な関係。新国立になると経費が問題。新国立を目指すというのは今後の課題。

意見1（神尾副会長） ①日本インカレに出られない人たちの場が最初。②個人選手権の名称の由来。③平塚で行う場合の競技運営方法（工夫：W-upの場など）。④平塚に限らず、今後様々な面で検討が必要。

意見2（大西） 先ほどの質問に再回答。財務的なこと。①競技場の使用料。②ケーブルテレビ。

質問2（吉村） 時期をずらすことが可能か。

質問3（吉村） 賞金レースや特別の名誉があるか。

質問4（吉村） NTCを自由に利用できたらどうか。

第2部 アジアパーミット大会開催の可能性と展望

議論の前提となるIAAFランキング制度を紹介、海外選手の招待と出場区分などの扱いを論議した。大会のグレード・アップや運営のレベル向上と開催時期などにも話題が及んだ。また会場との質疑応答もあった。その模様の一部を要約して報告する。

1. IAAFランキング制度との関連

船原 IAAFランキング制度の仕組みについて

関根 ①今までの大会参加資格は標準記録を期間内に1回超えること。②今後の参加資格はランキングポイントの算出等で決定（ポイントは記録と順位スコアで）。③学連の大会は一番下のステータス。④100mの例で追風・向風も含めて説明。⑤有効期限あり。⑦今後の課題：大会のステータスを上げていくためには記録を出す仕組みを作っていくこと。

船原 ポイント制度のイメージができた。追風での競技はポイント制度の中でも有効。

2. 海外選手の招待

船原 海外選手の招待は、出場選手は賛成多数。一方、大学はちょっと。

栗山 アンケートによると、1位の評価が大学によって違う。指導者と選手に関しての説明があった。またオープン扱いをめぐる方策なども述べた。

船原 アジアパーミット大会になれば順位が重要。そうなればオープン参加というわけにはいかない。

植田 ①個人選手権の歩みと強化方針。②参加標準基準とオープンの考え方。③日本学連独自のランキング制度の企画立案（強化のためにその大会に出るという目標にする）。④いい成績の場合は特典などの授与を。

船原 勝者への褒美は、財政的に可能ならば、より魅力的な大会になるのでは。

3. 海外選手のオープン

船原 海外選手についてオープンにすべきか否か。

長沢 大学の事例を紹介（現状）。

神尾 ①台湾選手を迎える際の経緯。②誰とでもやろう、それが個人選手権だという話だった。

船原 オープン参加扱いはどうか。

吉村 日本独自のランキング制度があってもよい。

三条 今はいろんなことを制度として変えなければならぬので面白いけど難しい。

船原 海外選手に順位をつけた方がいいという声。今年もその方向。今後の課題はランキング制度との兼ね合いでどうなるのか。

4. 大会のグレード・アップ

三条 学連の試合は一番下のグレード。それ自体を上げる方法はあるのか。

関根 ①学生の競技会記録すべてを国際陸連に申請したい。②日本の学生が大会で高レベルで競技しているということを国際陸連に知らせるために発信していきたい。③日本学連競技委員会ができることから始めていきたい。

船原 ①箱根駅伝予選会の人数とその記録水準の高さは世界的に見ても非常に驚くべきものなので、もっとアピールしてもいいのでは(大会のステータスが上がるかも)。②IAAFの記録ランキングの実際は、現在システム化や申告の問題があるのでは。

5. 大会運営のレベル・アップ

船原 大会運営のレベルアップはどうか。

宮崎 ①地元とのタイアップ。②ハンマー投の放映は今後の課題。③アナウンスは地元陸協の協力。④優勝者インタビューの評価(好評)。

障子 総務委員会の広報(案)。①地元との連携で集客をしたい。②ハンマー投げではSNSやインターネット中継などでライブが見られる工夫をしたい。

船原 神奈川陸協の協力について

関根 ①現状の競技運営レベル。②個人選手権の舞台とその環境づくり(学生と陸協で):雨天での事例。③学生の発想と具体的支援。④今後の課題:アイデアや要望等を学生と考えて、毎年グレードアップできる大会にしたい。

6. 個人選手権の開催時期

船原 開催時期の問題。

栗山 ①ユニバーシアード大会の開催時期を考えると選考は5月上旬がリミット。②この大会を最終選考会と位置付けるならば4月下旬か5月上旬に開催できれば最高の選考会になる。③個人選手権のグレードも上がるのではないかな。

船原 5月開催と地区インカレとの兼ね合いはどうか。

杉山(北海道学連) 5月上旬はユニバの選考大会につながる。理由:①選考会の盛り上がり。②日本陸連のグランプリシリーズと並行。③アジアパーミッ

ト大会との重なりでイメージ及び質のアップ。④個人選手権のステータスを高めるチャンス。⑤まさに変化になるきっかけ。

黒須(東海学連) ①「日の丸」が懸かった選考大会になるのは非常にいい。②海外選手の扱いについての意見があった(検討課題)。

船原 時期については実務的に何か難しいか

大西 ①ユニバ大会は7月初旬の開催が多く、ナポリ2019は7月第1週。②JOCは2カ月前が締切りで今回は5月7日。③これまでの選考大会と出場選手の限界に関する実情を述べた。④台北2017の選考会(個人選手権)はいい記録が出て大変盛り上がった。⑤4月のどこかに開催するのも面白い変化。⑥ユニバ大会の開催期日を考えると、学連主体で代表選手を選ぶことについて。

鶴崎(中国四国学連) 開催時期は5月で構わないが、大会が早まると選手が出られる枠を狭めてしまう(懸念)。

三条 地区インカレから個人選手権という流れに改革が行える。大胆な発想の転換もできるのでは。

船原 平塚は4月、5月の開催でも大丈夫ですか。

大西 平塚はこの大会を最優先してくれている。たぶん問題ないと思う。

船原 ①今までの固定観念をばらして開催時期も別の視点から考え直せるのではないかな。②ユニバーシアード大会の選考会を頭に置いて、大会のグレードを上げるとか、選考会のステータスを上げるなどの意味もある。③台湾やアジアの選手にとっても早い時期は望むところではないかな。

<まとめにかえて>

阿保 ①今後、報告書(要旨)を作成してホームページに掲載する。②今日の討議内容は決定事項ではない。

<閉会挨拶>

永井専務理事 まとめると次のようになる。①今回は個人選手権をターゲットにした総括(計画・実行・評価)であったので、すごく意味があった。②大会の始まりは新人の登竜門。紆余曲折を経て今日の形。③大会の開催場所。④補助グラウンド。⑤大会の経費。⑥神奈川陸協への感謝。⑦選考会の時期。⑧大会始まってからの進化と今後の課題・目標。⑨検証への感謝。

以上